新　刊　紹　介

1. 日本古代の交易と社会　宮川麻紀著
2. 中世やまと絵史論　高岸輝著
3. 鎌倉府発給文書の研究
   （戎光祥中世織豊期論叢　1）　黒田基樹編著
4. 興福院所蔵　鷹山家文書調査報告書
   （生駒市文化財調査報告書　第38集）　生駒市教育委員会編
5. 百年戦争――中世ヨーロッパ最後の戦い――
   （中公新書　2582）　佐藤猛著

宮川麻紀著『日本古代の交易と社会』

吉川弘文館　二〇二〇・二刊
A5　二九六頁　九五〇〇円

本書は、日本古代の市と交易、総じて流通経済をテーマとする。かつて鬼頭清明氏が律令国家財政を「実物貢納経済」と説明するなかで、流通経済への依拠が不可欠であることを論じ、栄原永遠男氏が奈良時代の流通経済の全体像と構造的特質を鮮やかに示した分野である。こうした研究史を踏まえ、制度と実態の個別検討や、ヤマト王権と律令国家の連続性を軸に、国家と市・交易・流通経済との関係性を捉え直すことを本書は目指す。

第Ⅰ部「律令国家と市」では、市に関する日唐令の比較から日本では「官設市」を地方に置かない方針で、管理者である市司は東西市にのみ置いたことなどを指摘する。これまで諸国の市司の存在を示すとされてきた史料を再検討し、その見直しを迫った意義は大きい（第一章）。第二章では、市の開閉に関する日唐令の比較などからその象徴的な側面に光を当て、第三章では一転して東西市の「廛」と長屋王家木簡などに見える「店」との差異について、平安期の展開も含めて検討する。

第Ⅱ部「ヤマト王権による開発と交易」は、交易や市についてヤマト王権から律令国家への連続性が意識されてこなかったという問題意識から、市とヤマト王権との関係性について検討する。海石榴市や軽市など大和の市が交通の要衝に形成されることを確認したうえで、王権により政治的に利用されたとする（第一章）。また、村屋宅や丹波宅など正倉院文書に見える「宅」はこれまで下級官人の交易拠点とされてきたが、もとは「王権の所領」であり、寺院に施入され、庄園化して宅が置かれたと指摘する（第二章）。第三章は、播磨国における開発と交通をヤマト王権との関係から検討する。

第Ⅲ部「交易価格と地方財政」は、国司と地方の流通経済との関係について交易価格を軸に論じる。国家によって設定される估価は地方には適用されず、八世紀は郡司や郡雑任らが流通経済に深く関与していたとする（第一章）。九世紀には中央への貢納

物の交易価格として「国例の価」が形成され、郡雑任などを務める在地の有力者層が国府官人に組織されていくなかで、流通経済の再編が起きたと評価する（第二章）。

第Ⅳ部「古代の社会と流通経済」は、先行研究で提唱され、また議論されてきた「交易圏」の形成と内実について再検討を試み（第一章）、律令国家財政と流通経済との関係性について、その特質も含めて概観する（第二章）。

本書で特筆すべきは、国司と流通経済との関係を丁寧に整理し、地方社会の実態的側面に切り込んだ点にある。一方、官設の東西市をめぐっては、令制以前の市からの連続性を強調する。しかし、そのためにかえって東西市の画期性やその限界が見えにくくなっていることはないだろうか。著者が「日本固有の目的意識にもとづいて成立した」とする東西市の構造や平安期の展開など、今後さらに議論が深まることを期待したい。

（堀部猛）

高岸輝著

『中世やまと絵史論』

吉川弘文館　二〇二〇・二刊
A5　四四四頁　一〇〇〇〇円

室町時代の絵師・土佐派の系譜を政治動向と絡めて描き直した最初の著書『室町王権と絵画』（京都大学学術出版会、二〇〇四年）以降に発表された論文の再録を中心とする。初出は美術史学に関わる雑誌や展覧会図録のみならず、むしろ国文学・日本史学の雑誌や論集など、幅広い媒体に掲載されたものを一書となす。著者が多くの分野や課題からの需めに応じつつ、新しい素材や視角を提示してきた様子がうかがえる。それとともに、個別の機会では必ずしも見えやすくはなかった、著者自身の関心のありかや論文相互の脈絡が、総体として見通し良くなったであろう。

扱われる時代も、引き続き南北朝・室町時代に重心を置きながら、前後の時期、とくに院政期から鎌倉時代の絵巻に関する章も配される。前論文集の中心をなす軸となった足利将軍家と土佐派絵師との関係を

継承し、『室町絵巻の魔力』（吉川弘文館、二〇〇八年）で一般読者にも向けて叙述された、絵巻の制作と享受・蒐集の権力性など、文化の政治的な側面への関心を持続する。それは本書の後半部にて、十五世紀末頃から、絵師としては土佐光信によって、視覚による国土支配が「清水寺縁起絵巻」のような具体的な作品として生み出されてくるという把握へも連なる。また「後三年合戦絵巻」の様式的な検討にもとづき、院政期絵巻の復活を確認するところは、絵画史上での南北朝期もしくは十四世紀を再定置する意欲とも連動する。

十四世紀以上に、造形史の面では、土佐光信の革新性が重要視されている。景観であれ人物であれ、注文主たちの要望を受けながら、「ありのまま」を描くことを表現として達成した。片や「地蔵堂草紙絵巻」のような小絵では、それにふさわしい洒脱な表現で、物語人物の巧みな心理描出を減算的な方法で実現し、新たな価値を創造したと評価する。

文献史学による知見を直に絵画解釈に援用する社会反映型の分析ではなく、あくま

で作品、とりわけ造形性を出発点としながら、その領域に留まらず、文芸的なイメージや現実の政治過程を交錯させ、歴史的な社会にあった絵画の生命を描き、社会の意識・感覚の変容という時代の大きなうねりの把握へと至る。それは遺品の分析に加えて、『看聞日記』の唐絵鑑賞の記事や土佐光信の画料返還の書状など、多くは伝わらない絵画や絵師に関する直接的な文献史料を読み解いて、制作・享受の現場へ迫ろうとする試みによっても支えられている。

新稿として加えられたのは、「「遊行上人縁起絵巻」諸本の様式と年代」と「ハーバード大学本「源氏物語画帖」の空間構成」の二章である。前者は近年の諸本調査と評価見直しを牽引しつつ、現状の整理を提示する。（なお図47・48が別本の同じ場面を比較させるレイアウトは、他書でも模倣して良い。）後者は著者の思い入れも深い光信作品の分析で、物語を始発とする読みからは距離を置き、視覚的側面から光信がなした空間表現の画期性を強調する。カラー口絵にも掲げる「須磨」の場面で、海面に映る金雲の影の描写についての記述は、英文書名 "Reflecions on Medieval Yamato-e" とも響き合う。

（藤原重雄）

黒田基樹編著

『鎌倉府発給文書の研究』

（戎光祥中世織豊期論叢　1）

戎光祥出版　二〇二〇・二刊

A5　四七六頁　一三五〇〇円

本書は、室町期東国史研究を牽引する九名の研究者が、鎌倉府や関東大名の発給文書、鎌倉府の遵行の実態について分析した諸論考を集成したものである。各論の分析は、網羅的に取集した関係文書を手がかりに進められる。

第1部「鎌倉府の発給文書」では、鎌倉府構成員の発給文書を考察する。駒見敬祐「鎌倉公方の発給文書」は、各代の鎌倉公方の発給文書から、公方権力の確立過程や関東勢力との結びつきを論じる。杉山一弥「関東管領の奉書」は、時期によって関東管領の奉書の役割が変化し、引付機能の比重が大きくなることを指摘。植田真平「鎌倉府奉行人連署奉書の機能と特徴」は、室町幕府奉行人奉書と比較しながら、鎌倉府奉行人連署奉書の様式や機能、時期的変化を検討し、応永末年以降、両府の訴訟制度改革で機能が拡大したと論じる。木下聡「鎌倉府政所執事・問注所執事奉書の機能と性格」は、幕府政所と比較しながら政所執事の役割や奉書の様式を明らかにするとともに、問注所執事奉書の存在を疑問視する。

第2部「関東大名層の発給文書」では、関東やその周縁部の大名の発給文書を考察する。黒田基樹「山内上杉氏の発給文書」は、当主・被官の発給文書の特徴や、筆跡から山内上杉氏文書の作成状況を明らかにする。駒見「犬懸上杉氏の発給文書」は、犬懸上杉氏の政治的な位置づけや被官の検出を行う。花岡康隆「越後上杉氏の発給文書」は、時期ごとの守護・守護代・守護直臣の発給文書の特質を、政治状況をふまえながら指摘。石橋一展「南北朝・室町期の下総千葉氏の発給文書について」は、当主・一族・家臣の発給文書の内容や署名、文書様式を検討。谷口雄太「駿河今川氏の

発給文書」は、当主・家臣の発給文書を集め、史料上の文書の呼称を分析した。

第3部「鎌倉府の遵行体制」では、遵行に関わる文書を集め、鎌倉府の遵行のあり方を考察する。杉山「関東管領の施行状」は、歴代の関東管領の沙汰付に関する施行状を個別に検証し、その特徴を指摘。植田「鎌倉府の奉公衆両使遵行と奉行人両使遵行」は、奉公衆や奉行人の両使遵行を選択した受益者の視点から、ふたつの両使遵行の相違点や共通点を論じる。木下「相模国・武蔵国における遵行」、中根正人「常陸国における遵行」は時期ごとに、石橋「下野国における遵行の実態について」は対象地ごとに、各国の遵行の実態や変化を検討する。

近年、室町期東国史研究は、史料環境の整備や先行研究の蓄積により、飛躍的に進展している。かかる成果はもちろん、本書で収集された発給文書、それによって明らかになった基礎的事実をもとに、室町期における東国支配の全体像をより具体的かつ多角的に描き出していくことが可能となろう。本書は、同研究のさらなる発展の足がかりとなる一書である。（亀ヶ谷憲史）

生駒市教育委員会編

『興福院所蔵　鷹山家文書調査報告書』（生駒市文化財調査報告書　第38集）

生駒市教育委員会　二〇二〇・三刊
A4　二二三頁　二〇〇〇円

鷹山家文書は、大和国添下郡鷹山庄（生駒市高山）を本拠に、興福寺衆徒として活動した鷹山氏が残した中世文書で、江戸前期に同氏出身者が中興した尼寺興福院（こんぶいん、奈良市法蓮町）に伝わる。これまでもっぱら京都大学文学部影写本「興福院文書」およびそれを転写した東京大学史料編纂所影写本で利用されており、全点の翻刻公刊は本書が初めてとなる。

筒井氏や越智氏など、衆徒国民と呼ばれた大和武士の発給文書は、興福寺以下の寺社が残した文書中に散見する。しかし、彼らの家が伝えた文書はほとんど残っていない。その中で、一六世紀の文書約百通からなる鷹山家文書はきわめて貴重だ。

鷹山庄は、北は傍示越を経て河内国交野郡に通じ、東を南山城に接する。天文年間の鷹山弘頼は、河内守護代遊佐長教の下で上山城守護代をつとめ、国境を越える活動を見せた。河内畠山氏と細川氏の発給文書を多数含むこの文書群は、大和一国にとどまらず畿内政治史の重要史料でもある。

本書は三章からなり、第一章「高山地域の概要」は、地域に今なお残る鷹山氏の痕跡の調査報告。同氏は天正一三年（一五八五）伊賀に移封された筒井定次に従ってこの地を離れたが、墓所には二五基の石塔が残り、家臣の後裔と伝える人びとが結成した高山八幡宮の無足人座という集団の手で毎年法要が営まれているとのこと。

第二章「鷹山家文書について」が史料集本体。最初に解説と目録を配し、中世文書二巻一〇六通、戦国期書写の犬追物伝書一巻、江戸前期成立の系図一巻、興福院の近世文書六通（小堀正一書状など）の釈文を収める。続いて近世文書を除く全点の図版を載せ、花押集を付す。さらに関連史料として「大乗院寺社雑事記」ほかの記録・文書

類から一六一件を集める。丁寧な作りで、史料集として理想的な構成を示す。

残念なのは肝心の釈文の校正が不十分なこと。ほんの一例だが、上巻六号「自清原御被遊之条改而申入候」は「乍凌爾口遊之条驚申入候」、上巻一一号「尤致恨儀」は「尤致祗候」、下巻三二号「是儀候哉、夫々」は「是式之儀更ニ」、「かいふん候由候」は「かんにん候やうに」が正しい。利用に際しては図版との照合が望まれる。

第三章「鷹山氏についての考察」は、天野忠幸「大和国人鷹山氏の興亡」、馬部隆弘「急成長する大和国境の在地勢力」、小谷利明「鷹山家文書に見える河内守護畠山氏」、新谷和之「鷹山弘頼と近江六角氏」の四編の論考を収める。近年急速に深化した戦国期畿内政治史研究の主要な論者が一堂に会しており、このことだけでも鷹山氏および鷹山家文書の重要性を窺うに足る。

最後に、第一章に対応して墓所の石塔群の拓本図版を載せる。石塔12の刻銘から永正元年（一五〇四）九月二二日の死没が知られる頼秀は、下巻下一～三号文書との照応から、今市城（奈良市今市町）で戦死した鷹山春藤だと推定される。下巻三号薬師寺長忠書状の「去廿一日」に討死という記載とは齟齬するが、興福寺学侶朝乗の日記「文亀年中記写」は鷹山など二百余人の「生害」を二二日のことだと記しており、命日の正しさが確認できる。石塔の刻銘も諸史料とあわせての活用が期待される。

なお、一三二頁に鷹山家文書を収納する木箱の蓋裏墨書と思しき図版を載せる。江戸時代に東大寺大仏殿の再建に尽力した公慶は同氏の出身である。この箱は、今から六七年前、公慶の二五〇年忌を機に、正倉院御物の修理で名高い工芸家坂本曲斎氏が興福院に寄進し、東大寺史の研究で知られる堀池春峰氏が寄進銘を揮毫したものであった。この文書群が奈良の歴史を伝える文化財として尊重されてきたことをよく物語る。本書の刊行はこの木箱の製作に続く営みでもある。戦国期畿内政治史のみならず、奈良の歴史に関心のある方に広く一覧をお勧めしたい。

（末柄豊）

佐藤猛著

『百年戦争――中世ヨーロッパ最後の戦い――』（中公新書　2582）

中央公論新社　二〇二〇・三刊
B40　三〇四頁　九二〇円

本書は、一三三七～一四五三年に英仏間で繰り広げられた所謂「百年戦争」について、その間の度重なる戦闘や休戦・和平交渉の一部始終を年代記・王令・書簡等の史料を用いて描き、改めてこの「戦争」の歴史的意義を解明するものである。戦争の当事者が誰であったかに着目しつつ、主戦地であったフランスの政治・社会構造の観点から、同戦争の通史を叙述している。序章と終章を含めて八章構成となる全体の概要は以下の通りである。

序章「中世のイングランドとフランス」では、英仏両王家の成り立ちと、当該戦争の背景にある双方の封建的主従関係の混沌について述べ、戦争の封建的・王朝的原因に触れる。「英仏」ないし「百年戦争」という用語の妥当性についても言及される。

第一章「イングランドの陸海制覇」では、英王エドワード三世が仏王フィリップ六世に対しアキテーヌの独立宣言を突き付けた一三三七年から、スロイスの海戦・クレシーの戦いで英軍が連勝していく一三四〇年代にかけての戦闘・休戦の過程を明らかにする。同時に、徴発と略奪とに喘ぐフランス社会の一端を訴訟要録から浮き彫りにしていく。第二章「フランス敗戦下の混乱」では、敗戦処理に追われる一三五〇年代のフランスが、ヴァロワ王権に対する地方貴族の反乱と、ポワティエの戦いでの仏王ジャン二世の捕囚とで、混迷を極めていく様を描く。続く第三章「平和条約をめぐる駆け引き」では、一三六〇年のブレティニー＝カレー平和条約による英国大陸領の「独立」から、一三七〇年代の仏王シャルル五世によるアキテーヌ再征服までの経緯を述べた上で、「王と王の戦争」が「王国と王国の戦争」に変質したと論じる。第四章「教会大分裂下の休戦と内戦」では、一三七八～一四一二年の大シスマ期における情勢を主にフランス側から描く。ブルゴーニュ派とアルマニャック派という二派対立の萌芽となる内紛の勃発、そしてイングランド人を敵とみなす「祖国愛」の醸成について述べられる。第五章「英仏連合王国の盛衰」においては、アザンクールでの英側大勝の後に結ばれたトロワ条約、その結果成立した英仏連合王国の興隆に触れた上で、ジャンヌ・ダルクのオルレアン解放を契機に始まる仏王シャルル七世の反撃に迫る。第六章「フランス勝利への戦略」では、一四三六年にパリ奪還を果たしたシャルル七世が、カレーを除く大陸の全ての英領土を再征服する過程を描く。また、一四五三年という慣例上の戦争終結年を追認するにあたり、同年シャルルが王令で戦争終結の公式見解を示したことに着目する。そして終章「百年戦争は何を遺したのか」では、この戦争の進展と共に、王同士から王国同士・臣民同士の戦争へ変貌を遂げたと論じ、英仏に国境意識が生まれ中世社会からの脱皮を遂げたとする。

このように本書は、英仏という二つの国家を「生み出した」ものとして、百年戦争を克明に描き出している。また、巻頭巻末の系図・地図・参考文献・略年表に加え、各章冒頭には主要人物リストがあり、読者の理解を助ける配慮も行き届いている。当該戦争の全体像と歴史的意義とを簡便に捉える上で、大変有益な書であると言えよう。

（田野崎アンドレーア嵐）